

氏名	小松原 尚		
授与した学位	博 士		
専攻分野の名称	学 術		
学位授与番号	博乙第3782号		
学位授与の日付	平成14年 9月30日		
学位授与の要件	博士の学位論文提出者 (学位規則第4条第2項該当)		
学位論文の題目	自然環境の観光利用に関する研究—北海道における 観光地の存立形態—		
論文審査委員	教授 北村修二	教授 品部義博	教授 谷口 守

#### 学位論文内容の要旨

グローバル化の進展は地域相互の連携や競争を都道府県や場合によっては国の枠組みさえ超越して展開する可能性を秘めている。このような現段階だからこそ地域における資源の特性をしっかりと把握し、活用することが重要になっている。

観光による地域振興を考える場合、1年間を通じて安定した需要を確保することは理想である。北海道でも8月を中心とした夏季型の観光地から脱皮を図ろうとする試みは様々あるが、自然観光資源の季節性や、サービス化・ソフト化の進展の中での、都市生活者からの高度化する需要に十分に対応することへの困難さのため、通年観光化にはまだ、工夫の余地を残している。

土木技術の進歩の成果と経済成長期における豊富な財政資金を享受し、20世紀後半の北海道にあっても自然環境の資源化を積極的に行なった。しかし、日本経済が拡大基調から縮小のそれへと大きく転換した現段階にあって、これまで当然視されてきた行政による補助金の受皿としての施設・設備投資も再考に迫られる。単に開発の推進か、抑制かという二元論的な発想ではなく、観光資源を歴史的経緯や自然環境を踏まえつつ活用するための経営的視点にたった投資行動が求められている。

北海道内にあってもそれぞれの地域における自然環境を活かしつつ、道外客に焦点をあてて観光地としての展開を模索している。国土の辺陲部にあっても釧路湿原地域のようにナショナルレベルの自然観光資源を活用し利用客の増大をはかってきた。都市生活者の自然志向の高揚と持続の状況下で、これまでのマス・ツーリズム的な旅行では満足できない人々に対して、都会の日常生活では得られない地域の自然や生活体験を提供するエコ・ツーリズムは過疎地域の観光地にとって新たな客層を掘起こす契機ともなっている。

## 論文審査結果の要旨

この学位論文は、グローバル化が進展するもとは、地域における資源の特性を活用することが重要であり、観光による地域振興は、まさにそれに当たることを、地域的事例をあげ解明するものである。事実北海道でも、自然観光資源の季節性や、サービス化・ソフト化の進展により、都市生活者からの高度な需要への対応等により、夏期型の観光地からの脱皮、すなわち通年観光地化等をはじめとして、なお開発の余地が残されており、その開発が地域振興の鍵となっている。

土木事業等の技術の進歩と豊富な財政資金を背景とした北海道のこれまでの自然環境の資源化が、近年日本経済が縮小化し、補助金による施設や設備への投資の見直しのなか、再考を迫られ、観光資源を歴史的経緯や自然環境を踏まえた活用という視点、またその経営的視点から投資行動の変革が求められている。

それは、北海道では、とりわけ地域の自然環境を活用した、しかも国内外の客を焦点に当てた観光地づくりである。例えば、人づくりとも関わるニセコ町のスキー観光地化、またオホーツク海に面した網走市では、「刑務所」等の人文観光と天都山を中心とした自然公園、また春先のアジア特にその亜熱帯地域からの観光客を取り込む「流氷観光」はこれに当たる。さらに釧路湿原地域では、ナショナルレベルでの自然観光資源の活用化による観光客の増大と地域振興化が図られている。それは、これまでのマス・ツーリズム的な旅行では満足できない人を、しかも都会では得られない地域の資源や生活を体験させるというエコ・ツーリズムという形で提供するものであり、それらは、過疎地域の観光において新たな客層を掘り起こす形で、地域の振興に関わることを地域的事例から解明しているのである。

以上のように本研究は、北海道の従来からの観光を、自然環境のさらなる利用により、新たな観光地化が可能であり、それはさらなる地域振興につながることを解明しようとした、極めて意義深い研究であり、博士の学位に値するものである。